

台湾民主主義の旗手・鄭南榕烈士

身を挺して台湾の独立と民主化を推進したその軌跡

本誌編集部



在りし日の鄭南榕烈士

台湾の独立と言論の自由を求めて焼身自決

台湾にはかつて世界一長い戒厳令が布かれていた。戦後の一九四九年（昭和二十四年）五月二十日から一九八七年（同六十二年）七月十五日に至る、三十八年間である。

また、一九四八年五月十日から一九九一年（平成三年）五月一日に至る四十三年もの間、總統が立法院（国会に相当）の制限を受けず、意のままに戒厳令や緊急命令を発令できる「動員戡乱時期臨時條款」も定められ、中華民国はあくまでも「中国の正統政府」であり、大陸の反乱を平定しなければならぬ「動員戡乱時期」にあるということで、憲法が停止されていたのである。

もちろん、この期間は言論の自由や集会・結社の自由などは許されず、新聞の自由発行も禁じられていた。また、国民大会代表（参議院議員に相当）や立法委員（衆議院議員に相

当）などは、大陸反攻に成功するまで改選しないという緊急命令が蔣介石によって発動され、ここに所謂「万年国会議員」が誕生し、台湾人の国政への参与は剥奪されたのだった。

これが戦後、共産党との国共内戦に敗れて台湾に落ち延びてきた蔣介石・中国国民党（以下、国民党と略）の独裁下にあった中華民國の現状だった。そこで、台湾の人々を目覚めさせ、この現状を克服すべくその身を挺して挑んだのが、歿後「台湾建国烈士」の称号を捧げられた鄭南榕である。

李登輝前總統が台湾人として初めて總統に就任した一九八八年（昭和六十三年）、鄭南榕烈士は、当時、台湾独立建国聯盟主席だった許世楷氏（現駐日代表）の「台湾共和国憲法草案」を、自ら主宰し編集長をつとめる「自由時代週刊」（十二月九日発行、第百七十一号）に掲載した。

年が明け、高等検察庁は叛乱罪容疑で召喚しようとして出頭を命じたが、鄭烈士はこの名分なき召喚を拒否し、台北市



鄭南榕烈士の遺体の前に佇む葉菊蘭夫人
(1989年4月7日)

大陸出身の父と台湾人の母

内の自由時代社に籠城した。国民党の圧政に抗議し、台湾の
中華民國体制からの独立と完全な言論の自由を求めた籠城は
七十一日にも及び、「国民党は私を逮捕できない。逮捕でき
るとすれば、私の屍だけだ」と宣し、四月七日午前九時過
ぎ、百名を越える警官隊が包囲する中、宣言通り自らガソリ
ンをかぶって火を放ち、覚悟の自決を遂げたのだった。
これが事件のあらましである。

では、鄭南榕烈士がなぜ焼身自決にするに至ったのか、そ
の軌跡を生誕にさかのぼって素描してみよう。

鄭烈士は一九四七年（昭和二十二年）九月十二日、宜蘭県
五結郷に、四人兄弟の長男として生まれている。父の鄭木森
は中国福建省福州の出身で、日本時代
に台湾へ渡ってきた。母は客家系台湾
人の謝惠琛で、両親は理髪店を営んで
いた。

このように鄭烈士には台湾人の血が
半分流れていたが、身分証の本籍は
「外省人」と記載されていた。

鄭烈士は小さい頃から学に秀で、長
じて両親の命ずるまま国立成功大学工

程学科に入学した。しかし、工学系に進級した後も哲学に深
く傾倒していた鄭烈士は、輔仁大学を受験し直して哲学系に
入学する。

ここで知り合ったのが、後に結婚する葉菊蘭さんである。

葉菊蘭さんといえば日本でもよく知られている。彼女は鄭烈
士の自決後、民主進歩党（以下、民進党と略）から立法委員
に立候補して当選し、交通部長（運輸大臣に相当）や客家委
員会主任委員（客家担当大臣）に就任し、最近まで女性初の
行政院副院長（内閣の副首相）をつとめていた方である。

鄭烈士の歿後、「台湾独立を夢みた夫の遺志をついで」と
題した論考を「中央公論」平成二年四月号に発表している。

鄭南榕の死に直面したときの思いから、国会議員をめざすよ
うになった背景や、「人びとの心に翳りをもたらし、恐怖を
意識させる体制」だったという当時の台湾社会の実情を余す
ことなく描いている、約一万字に及ぶ切々たる論考だ。

この論考でも触れているが、鄭烈士は大学時代から国民党
の独裁体制に違和感を抱き、台湾の独立について考えていた
という。それは、自決直前にまとめた遺書というべき「独立
こそ、台湾唯一の活路」の中でも「大学時代から、この問題
を考え始めました。長時間の思索と熟慮を経た後、どのよう
な視点に立つても、台湾は独立してこそはじめて明るい未来
がある、と思うようになりました」とはっきり述べている。

それを示すエピソードを、葉菊蘭さんは自決後に発行された『自由時代週刊』（一九八九年四月十六日付、第二百七十二号）の中で次のように述懐している。

独立独行型でハンサムだった鄭烈士に好意を寄せる女子学生は少なくなく、葉さんもその一人だったというが、輔仁大学の一年生のとき、鄭烈士はクラス代表となったことがあった。これは「立候補した学生が国民党の推薦であることを知って、かれは怒り、直ちに自分も立候補して対抗し、女子学生が全員かれに票を入れたので、当選できた」のだという。また、輔仁大学から台湾大学哲学系に転じた鄭烈士だったが、卒業はしなかった。その理由は「陳腐な孫文思想を強制する『国父遺教』の授業を拒否したため」だったという。国士としての胆力がすでに現れているエピソードである。

その後、雑誌の取材記者をとめる傍ら、雑誌「深耕」に寄稿し、また雑誌「生根」の編集も手がけていた。当時、この「生根」のメンバーは「新しい世代」と称されたという。

一九八四年（同五十九年）、三十七歳の時に先鋭的な内容の「自由時代週刊」を創刊し、いよいよ本格的に国民党との戦いに入ってゆく。この「自由時代週刊」は国民党の腐敗ぶりを容赦なく暴露し、次々とタブーを打ち破っていった。

現在、台湾独立建国聯盟の主席をとめる黄昭堂氏は「雑誌の内容は国民党の極秘事項、高級幹部の秘事、秘密警察機

関の内部抗争、軍事国防に関する情報……など、なみの神経の持ち主では掲載する勇気のないものばかりだ。その結果、国民党特務機関からの脅迫があいつぎ、告訴沙汰は引きも切らなかった」（月刊「台湾青年」一九八九年五・六月合併号）と証している。それは常に死と隣合わせの行動だったのだ。

すべてが「台湾史上初」という驚くべき行動力

一九八六年（同六十一年）には、先に触れた世界最長の戒嚴令を大衆運動によって打破するため、鄭烈士は自由時代社を根城に「五・一九綠色運動」を組織した。五月十九日、台北の龍山寺で開かれた戒嚴令撤廃を求めるこの抗議活動は、台湾で初めて行われた大規模な大衆運動だった。

鄭烈士は一方で、結党が禁止されていたにも拘らず、国民党に対抗する政党「台湾民主党」を結成する準備を進めていて、その延長として民進黨結党工作にも参画している。しかし、鄭烈士は一九八六年九月二十八日に設立された民進黨には加わらなかった。なぜなら、メディアの主宰者として客観的立場を堅持しようとしたからである。同様の理由で、台湾独立建国聯盟にも加入していない。

ところで、台湾では今でこそ「二・二八事件」について自由に語られるようになったが、国民党が一九四七年（同二十二年）二月、前途有為の台湾青年などを三万人以上も虐殺し



平成元年4月16日、在日台湾同郷会の主催で開かれた日本における鄭南榕追悼会

たこの事件を、戦後台湾で初めて陽の下に晒したのもまた鄭南榕だった。鄭烈士は一九八七年二月四日、陳永興医師らとともに「二二八和平日促進会」を結成し、暗闇の中に押し込められていた二・二八事件のタブーを解いたのだった。

さらに、この年の四月六日発行の「自由時代週刊」に、タブー視されていた台湾独立活動家へのインタビュー記事掲載する。その活動家とは台湾独立建国聯盟日本本部の許世楷委員長（当時）で、台湾の心ある人々に、独立とは中華民国体制からの独立であることを初めて知らしめた。

この月の十八日には、台北の金華国民中学の校庭で開かれた「国家安全法反対デモ説明会」において、数千の参加者を前に堂々と台湾の独立を主張した。公然と台湾独立を主張したのは、鄭南榕烈士をもって嚆矢とする。

生前の鄭烈士と親交を持ち、自決後、編集長だった「台湾青年」で「鄭南榕記念特集」を組んだ宋重陽こと宗像隆幸氏は、その中で「鄭南榕は、ついに公開の場で、台湾独立を公然と主張し、台湾で最大のタブーを打破した。このとき以来、『自

由時代』誌は、台湾独立を前面に打ち出し、台湾全島で、台湾独立が公然と叫ばれるようになったのである」（鄭南榕よ、あなたは神となった）と、その意義を高く評価している。

そして、一九八八年十二月、これもタブーだった憲法論議を起すため、許世楷氏の「台湾共和国憲法草案」を「自由時代週刊」に掲載したのだった。これも台湾初のこと、中華民国の虚構を暴いて台湾社会に強烈な衝撃を与えた。

*

鄭烈士の歿後、後藤新平や李登輝前總統の胸像を造った奇美実業の創業者である許文龍氏は、鄭南榕烈士の胸像を造ってその実績を顕彰し、台南の奇美博物館に展示している。

また、自決した自由時代社の編集長室は現在、焼けただけたまま残され、詩人の李敏勇氏が理事長をつとめる鄭南榕基金会が運営する記念館となっている。訪れる日本人はまだ少ない。国民党の占領体制を根底から揺さぶった、台湾史に燦然と輝く歴史的な場所である。台湾に行ったらぜひ訪れて欲しいものだ。

（財）鄭南榕基金会 <http://www.nylon.org.tw>

台北市民権東路三段一〇六巷三弄一〇三階

電話 〇二―二五四六―八七六六

（四月六日に開催する「台湾建国烈士 鄭南榕先生を偲ぶ集い」の詳細は本誌裏表紙を参照）